令和６年度　立川市立大山小学校　学力調査等分析結果

○令和６年度全国学力・学習状況調査の結果

【国語科】

分類		区分	平均正答率(%)		
全体			本校	東京都（公立）	全国（公立）
			↑57	↑70	↑67.7
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	46.8	67.9	64.4
		(2) 情報の扱い方に関する事項	↑76.9	↑88.8	↑86.9
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	66.7	75.3	74.6
	思考力、判断力、表現力等	A　話すこと・聞くこと	51.3	63.9	59.8
		B　書くこと	↑60.3	↑69.9	↑68.4
		C　読むこと	**↑65.8**	**71.9**	**70.7**
評価の観点		知識・技能	↑55.1	72.6	↑69.8
		思考・判断・表現	↑59.0	↑68.4	↑66.0
		主体的に学習に取り組む態度			
問題形式		選択式	61.8	73.0	69.9
		短答式	37.2	63.1	59.7
		記述式	55.1	63.7	64.6

【算数科】

分類	区分	平均正答率(%)		
		本校	東京都（公立）	全国（公立）
全体		48	↑68	↑63.4
学習指導要領の領域	A　数と計算	48.3	70.6	66.0
	B　図形	↑55.1	↑70.8	↑66.3
	C　測定			
	C　変化と関係	34.2	59.3	51.7
	D　データの活用	44.9	65.2	61.8
評価の観点	**知識・技能**	**54.7**	**↑76.7**	**↑72.8**
	思考・判断・表現	38.5	57.1	51.4
	主体的に学習に取り組む態度			
問題形式	選択式	59.5	79.2	75.3
	短答式	44.7	67.6	62.0
	記述式	37.8	55.1	51.0

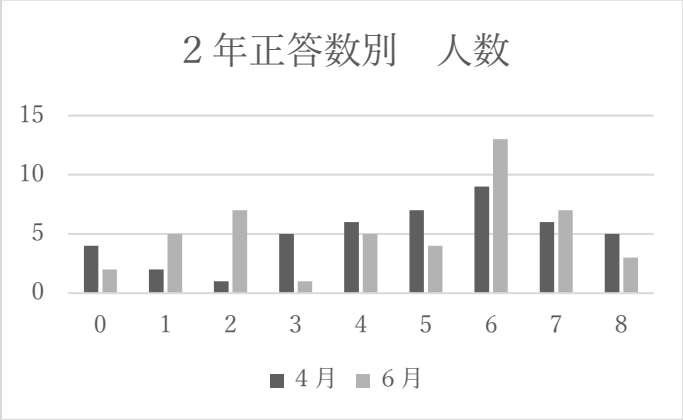
今年度の結果は、正答率が都平均を全体的に下回っているものの、昨年度と比べると国語科では全国平均が微増に留まったところ、本校では２％の向上が見られた。これらは、授業改善の取組と今年度から実施している教科担任制による指導が効果を上げている結果だと考えられる。特に、思考力・判断力・表現力等における「読むこと」の分野では、都・全国共に昨年度平均を下回る中で、本校では８．９％上昇している。日常の読み取り指導や自分の考えを伝える学習活動により重点を置き、得意分野としてさらに力を伸ばせるようにしていく。

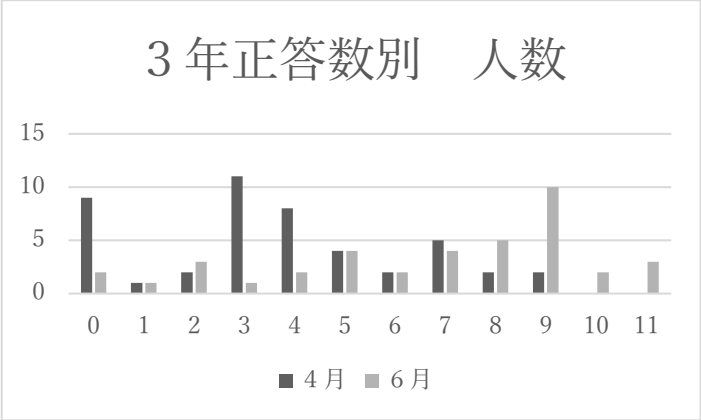
算数科では、平均正答率の推移は都・全国とほぼ同様ではあるが、「知識・技能」の観点では本校のみ落ち込みが見られた。授業では帯として計算問題等を取り入れ、朝学習内容の再検討とデジタルドリルの積極的な活用、個に応じた学習支援を工夫して、基礎的な学習内容の積み重ねを図っていく。

○令和６年度１学期　東京ベーシック・ドリル診断テストＡ分析

※各表とも
横軸：正答数（問）
縦軸：正答数における学年児童数の数（人）

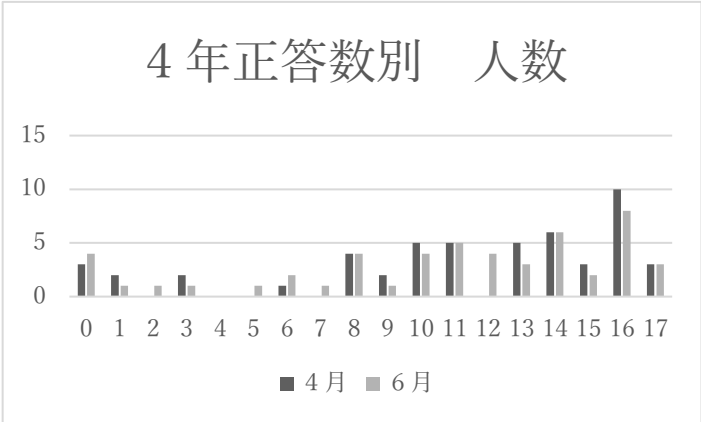
【正答数における学年人数の分布グラフ（４月・６月）】

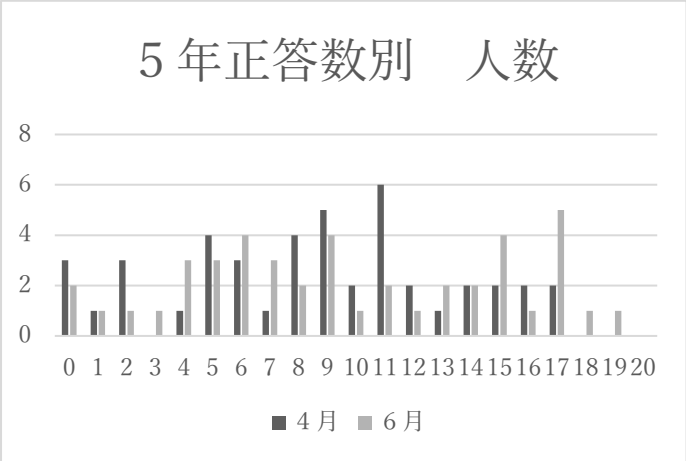


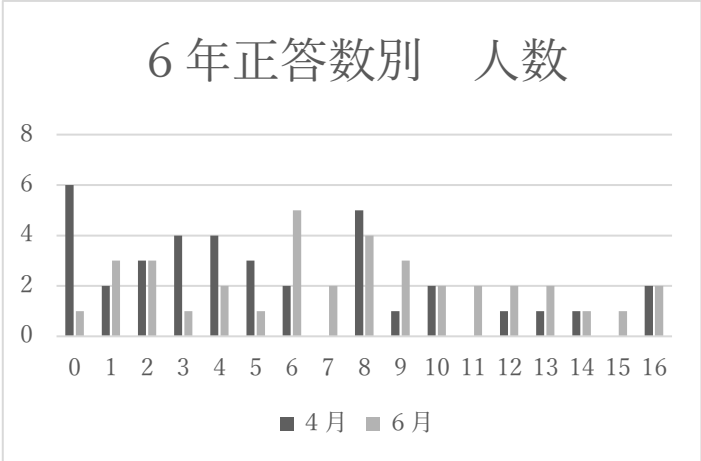


【平均正答率】

学年＼％	本校２回目	昨年度立川市平均	本校との差
2	57%	71%	15%
3	91%	57%	-34%
4	63%	66%	3%
5	48%	62%	14%
6	48%	54%	7%







４月に１回目、６月に２回目の東京ベーシック・ドリルＡ診断を行った。１回目の結果を基にできなかった問題の復習に取り組んだ後、２回目のテストを実施することで学習内容の定着化を図っている。

平均正答率は昨年度の市の平均と比べると、学年によるばらつきが目立っている。

一方で、正答数を見ると、２回目の結果ではどの学年も正答数６割以上の児童が増えている。このことから、本校の課題は、正答数５割未満の児童への学習指導の工夫にあることが明らかになった。その中でも、どの学年にも存在している正答数が０の児童について、個別にどのような支援が必要であるかを検討していくことが重要であることも分かった。

基本的な学習内容（特に知識・技能）が定着していない現状があるため、算数科においては、既習の内容の積み重ねに工夫が必要である。そこで、週４回の朝学習の時間のうち２回を東京ベーシック・ドリルやデジタルドリルを用いた学習に充て、個に応じた問題を解かせて基本的な学習内容の定着化を図っていく。

また、全体的傾向として文章問題を正確に読み取る力に課題がある。習熟度別指導や朝学習・放課後学習においても、児童の実態に応じた個別指導を行い、基礎学力と文章を正確に読み取る力の定着を図り、学力の向上を目指していく。